

バベルの塔と十字架

丸山 勉

【聖書】 創世記 11 章 1 節～9 節

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。東の方から移動してきた人々は、シニアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた。彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。

主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」

主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。」

【序】 聖書の物語を「語り継ぐ」

早いもので8月もう終わろうとしています。72回目の敗戦記念日からも既に10日以上経ちました。色々な所で言われておりますが、あのかつての戦争のことを語り継ぐ人々がどんどん減っているということです。あの広島や長崎の被爆体験の「語り部」もそうです。また、沖縄のひめゆり学徒隊の、記念資料館での体験講話などは証言者の減少や高齢化で二年前に終了したそうです。それで今は、証言を受け継ぐ若い人々が、説明員として立っていく、そのリレーの大事な時期に来ているとラジオで聴きました。つまり、その当時を生きていない者たちが、それを受け継ぐのです。そんなことが可能なのでしょうか？戦争の体験を「思い起こす」ということであるなら、それは無理です。しかし、これもある番組で聞いたのですが、アメリカ人の詩人で、書物や絵本なども通して日本の戦争のことを日本人以上に伝えてくれているアーサー・ビナードさんがこのように仰っていたのが印象的でした。「過去のことを“想起して語る”ということではなく、“自分のこととして引き受ける”ということではそれは可能ですし、むしろ、ただこの様なことがあった、と語るよりも、それをどんな思いで語るか、ということが大事なことです」と。

聖書の物語もそうなのではないでしょうか。ただの古代の物語、或いは知識として読むことも可能です。けれども、“この私自身が”ここから何を聴き取るのか、神様は今の私に何を語って下さるのか、言ってみれば、御言葉が、私という存在を「突き刺して」語ってくれるメッセージを聴き取りたいと思うのです。

【1】「バベルの塔」の発端

バベルの塔の物語は有名ですけれども、聖書の描写は意外と簡潔です。全部で9節しかありません。ここには全世界の言葉がいかに多種多様になっているのか、その起源が神話の形で書かれています。この世界に色々な民族、言語、文化、それがあることは批判されることではなく、豊かさで

す。神様もあのノアの洪水の出来事のと、こう仰いました。創世記 9:1 です。「神はノアと彼の息子たちを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちよ』と。

ところが、今日の 11 章になりますと、その後の人間たちは、様々な地に満ちるというのではなく、一か所にまとまって移動していたようです。そしてこの時は一つの言語だったようです。そしてシニアルという地に平地を見つけ、そこに住み着いた、と 11:1 に書いてあります。そこで彼らは町を作ろうとしたのです。3 節に「石の代わりにれんがを、しっくい代わりにアスファルトを用いた」とあります。ここには文明の進歩を見ることも出来ますし、既にこの時代、現代建築に通じる様な技術を用いていたことが分かります。そしてその技術や知恵を用いて、その住み着いた町に高い塔を建て始めたのです。

けれども神様はこの高い塔の建設を自ら降られて中断させられました。何故でしょうか？様々な捉え方があるのでしょうか。「これは文明への批判だ」という方もあるでしょう。または「科学技術が人間の手に負えない所へと行ってしまうことへの警告だ」という方もあるでしょう。しかし聖書は、これを**神様と私たちの関係の物語**として語っていることを見落としてはいけないと思います。ここにも「語り継ぐ」物語、「聴くべき」物語があるのです。

[2]「バベルの塔」が孕む問題

創世記 10 章を読むと、この塔の建設を命じたのは、どうもニムロドと言う名の王であったようです。彼はノアの息子のひとり、ハムの孫にあたります。10:8 節からお読みしますと、「クシュにはまた、ニムロドが生まれた。ニムロドは地上で最初の勇士となった。彼は、主の御前に勇敢な狩人であり、『主の御前に勇敢な狩人ニムロドのようだ』という言い方がある。彼の王国の主な町は、バベル、ウルク、アッカドであり、それらはすべてシニアルの地にあった」とあります。

ニムロデは地上で最初の“勇士”とありますが、これは“権力者”と言った方がピッタリきます。“勇敢な”というの“強い力を持った”といったような意味があるようです。この**強力な権力者ニムロデ**は、「町」を作ろうとしたのです。つまり、人々が暮らす共同体です。それをただ一つの言語、また一つの場所ですとまとめた。かれはこの町に「塔」を立てたい、と思ったのです。その建設の理由が聖書にハッキリ記されています。

11:4「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」。

「全地に散らされることのないように」とあります。“散らされない”、つまり、人々の多様性を認めない町です。「地に群がり、地に満ちよ」と言われた神様のみこころとは逆です。その前には「天まで届く塔のある町を建て、有名になろう」とあります。「有名になろう」というのはちょっと変かもしれませんが。この時、他に比較する町などなかったのですから。どうもこれは、「自分の名を上げよう」といった意味のようです(口語訳)。そしてそれは「天にまで届く塔」なのだということです。「天に達したい」と思ったのでしょね。「天」というのは言うまでもなく、神様がおられるところという理解です。つまり、自分が神様の位置に、神様に替わって坐するのだ、自分には神様は不要なのだ、神様を引きずり下ろすのだ、という思いが見えてきます。「ニムロド」という名は、ヘブライ語で「我々は反逆する」という意味があるそうです。

ところで、紀元一世紀のユダヤ人の著名な歴史家・ヨセフスによる『ユダヤ古代誌』にはこう書いてあるそうです。

「ニムロデは、(ノアの洪水後)もし神が再び地を浸水させることを望むなら、神に復讐してやると威嚇した。水が達しないような高い塔を建てて、彼らの父祖たちが滅ぼされたことに対する復讐するというのである。人々は、神に服するのは奴隷になることだと考えて、ニムロデのこの勧告に熱心に従った。そこで彼らは塔の建設に着手した。……そして、塔は予想よりもはるかに早く建った」。

ニムロデの行為は、明らかに**不信仰**です。何故かといえば、神様は既にハッキリと「もう二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはない」(9:11)と約束されているのに、それを聞こうとしないで、神様に信頼しないで、そして恐れているのです。神様に反逆する心というものには、深い所で「平安」がないのだと思います。ですから、自分の力、自分の権力に頼って、人々が散らされないように、中央集権的な町を作るのです。「バベルの塔」というのは、その象徴(シンボル)ではないでしょうか。

[3] 私たちの内なる「バベルの塔」

神様はこのバベルの塔の建設を中断させられました。そして、その結果というのが示唆に富んでいると思いました。11:7~8です。『我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう』。主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。——「互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう」とありました。言葉が通じ合わなくなったのです。ここには、ただ「言語」がバラバラになったという意味以上のものがあるように思えて仕方がありません。つまり他者と「通じ合わない」という**人間のコミュニケーションの分裂**——それはいつも私たちを悩ます事柄だと思いますけれども、それは結局、私たちが神様のみ声を聴こうとしないということから始まっているのだ、ということを聖書は示してくれているのではないのでしょうか。

この「バベルの塔」の物語は、決してひとつごとではないのです。私たちも、いえ、この私も「内なるバベルの塔」と言いますか、そういうものを心の中に作っているのではないのでしょうか？ごく簡単に言えば、「わたしファースト」「俺ファースト」といった**高い塔**です。つまり、「私が一番」「俺が一番」といった思いです。

最近面白い本を読んだのですが、それは、健康社会学者の河合薫さんの『**他人をバカにしたがる男たち**』という新書版の本です。皆さんはこういうおじさんを見たことがありますか？とこの本は問います。例えば良い格好をしたサラリーマンがいます。恐らく会社ではそれなりの肩書を持つような紳士に見えるサラリーマンが、コンビニのレジで店員に尊大に振る舞うことがよくある、と。レシートを渡されたら「そんなもの、要らねえよ」と言ったり、お札を投げて渡したり、アルバイトの店員に「日本語、分かっているの？」と言ったりするおじさん。または初対面の人の卒業大学をさりげなく聞く人とか、プライベートでも自分の名刺を配る人とか、会社でも、活躍している若手社員を腐(く)さしたがる人とか、「前例がない。組織を分かっている」とよく言う人とか、妻が仕事で評価されているのが内心にくわないとか、そのような人のことを社会的に見て書いています。そういう人は逆に部下の前では下げない頭を、会社のトップの前では米つきバツタのように頭を下げ続けるものだ、それ

は不安の裏返しだ、と河合薫さんは言うのです。人は不安になればなるほど、保身に走ったり、権力の虜になってしまう、と言うのです。それは、男性だけではない、ともこの本は書いています。

これは自分にも耳の痛い話です。人によって態度が違う。嫌ですね。「首尾一貫」していない訳です。自分はどうかだろうかと思えます。私たち、知らず知らずのうちに、どこかで、いわゆる社会的評価(肩書や権威のようなもの)を欲しがり、その虜になってしまっていないでしょうか？社会的評価や評判は、その人の存在の本質ではないはずですが、けれども、私たちクリスチャンも、ともすると、他者との相対的な比較の中で自分の安心を作ってしまうのではないのでしょうか？そして、どこかで自分のものさしで他者を見下したりしてはいないのでしょうか？気付いたら「自分ファースト」という「バベルの塔」が出来てはいないのでしょうか？

[4] 高い塔の建設を中断させた主

神様の声を聴くということ、それは、本当は人間にとって、背を向けたいような事なのではないでしょうか？そうではないと思えます。むしろ本当の意味で「人間」であることの「安心」と「喜び」を与えるものだと思います。創世記で神様が、人間も含めてこの世界の全てのものを創造された時、「見よ、それは極めて良かった」と書いてあります。悪いものは何一つ、そして誰一人造られなかったのです。そうであるのに、いつしか人間は人間をそのように見るが出来なくなってしまうのです。

「重たい障がい者は、生きていても幸せになれない。意思疎通がとれない人間を私は安楽死させます」という様なことを、昨年7月に相模原市の障害者施設で起きた衝撃的な殺傷事件の、元職員であった容疑者の若者は手紙に書いたといひます。彼が責任のとれる精神状態であったのかどうか今後の焦点になってくるようです。それは、裁判上必要な手続きだと思えますが、しかし私は、このような価値観を持ってしまふに至る、人の心の危うさと言ひますか、もろさと言ひますか、敢えて言わせて頂くと、「悪魔のささやき」のようなものに、私たちは自分で自分を守ることはとても難しいのではないかと、思えて仕方がありません。もちろん彼がしてしまったことはとんでもない最悪なことです。しかし、では私の中に、彼が抱いてしまった差別思想の様なものが全くないのか？と神様に問われると、やはり「神様、この私を憐れんで下さい」と言わざるを得ない自分を発見してしまうのです。

人は、神様に聴くことを捨てる時、真の意味で「人間」が「人間」ではなくなってしまうのだ、ということをお物語は教えてくれているのではないのでしょうか。この塔が立つ前は、この地は「平地」でした。これは象徴的です。神様が導かれた地は、平らかな、フラットな土地なのです。高い所も低い所もない、上下関係がない場所です。そこに「塔」を立ててしまうのが人間です。

神様はこの塔の建設の一部始終をご覧になっていました。「天に届かせよう」と傲慢にも思ふ人間たちが作った塔なのですけれども、神様はさらに「上から」降(くだ)られて、裁かれました。

神様はこの塔の建設に「ストップ！」をかけたのです。これ以上行ったらとんでもないことになると思われたのです。本当なら、人間の方が青くなって直ちに悔い改めねばならないのに、神様の方が「このままでは人間は人間ではなくなる」と言わんばかりに、「言葉の混乱」という裁きを与えたのです。確かに、裁きです。しかし、もっと積極的には、神様が、罪ある人間に、この後、さらに生きる

道を与えられた、という恵みでもあります。ここから本当に「地に満ちよ」という新しい人間の歴史が始まったのですから。

[5] 見上げるべきものは「十字架」

先程「有名になろう」とは「名を上げよう」の意味だ、ということを申しました。これが人間の「罪」ですね。どこまでも「わたしファースト」。しかし、私たちは、その「逆」のことをして下さったお方を新約聖書で知らされています。

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました」(フィリピ 2:6～2:9)。

「神と等しい者であることに固執しようとは思わず」とあります。驚くべき言葉、そして素晴らしいキリスト讃歌です。わたしたちは、いつも「自分」に固執するではないですか！そんな「自分の名を上げる」高慢な、へりくだれない私たちに替わって、こともあろうに、神の御子・そのお方が天から「へりくだって」来て下さったのです。罪人である私たちを神様は見捨てられなかったのです。旧約聖書でも神様は様々な預言者をお立てになりましたけれども、人々はそれを無視してきました。そして、神様は、言ってみれば「最終手段」として、イエス・キリストを私たちに贈って下さいました。十字架の救いと言うのは、逆説なのです。本来ならば私たちが神様に、もう丸裸になって「ごめんなさい」と言って戻って行かなければならないのです。けれども、神様の前にへりくだることを忘れた私たちに替わって、逆に、神様の御子がへりくだられ、あのクリスマスの夜、この地に、幼子として来て下さったのです。それはまた、主が私たちのために死なれる十字架の歩みの始まりでもありました。神様は私たちの不信仰を承知の上で、私たちを滅ぼしませんでした。代わりに御子イエス様を、私たちのあがないの供え物とされたのです。ですからもう私たちは、内なる「バベルの塔」を築かなくてもよいのです。私たちが下から見上げるものは「バベルの塔」ではなく、「十字架」です。

[結]みこころの「天」になるごとく「地」にも

主の祈りの中の言葉に「みこころの天になるごとく地にもなさせたまえ」があります。宗教改革者たちは、この祈りを「神の御心が天にいる天使たちによって行われているように、地に住む私たちの中にも喜びをもって神への服従がなされるように」との意味であると理解し、教えたそうです。そうです、「バベルの塔」を何度でも砕いて頂き、罪赦されて私たちは「みこころ」に生きるようにされているのです。こんな者でも神様の愛を運ぶ者とされていることを感謝したいと思います。

祈り

主イエス・キリストの父なる神様、今朝の御言葉を感謝致します。

傲慢な者です。すぐに心の中に小さな「バベルの塔」を作ってしまいます。しかし、こんな私たちのただ中に、主イエス様が来て下さいました。そして私たちへの愛を、あの十字架でハッキリと示して下さいました。今、悔い改めます。あなたの愛によって、愛のない私を砕き、造り変えて下さい。

人と人との間に、真に通じ合う心・言葉をください。ただ一つの救い、主イエス様の十字架を、こ

の世にあつて証しさせて下さい。あなたの恵みに、この身をもって感謝して生きさせて下さい。

世界が謙虚にあなたの御声を聴くことが出来ますように。祈りながら、まず私たちから「みこころ」に生きることを始めさせてください。

主の御名によって祈ります。アーメン。